刺抜き地蔵

むかーし、あったと。

熊田にお茶のでぇ好きな六兵衛という爺様がおおたと。六兵衛は、一人息子の仙太郎と婆様と暮らしておった。仙太郎は疱瘡で、婆様は六〇歳の春に、二人ともあっけなく死んでしまってな、とうとう一人ぽっちになっちまったんだと。

六兵衛さんは、でぇ好きなお茶を飲みながら、毎日、毎日、

「仙太郎や婆様がいた頃は楽しかったなあ。あの頃に戻りてぇなあ」

って思いながら、暮らしていたんだと。

もともと人情深え爺様だったんだけども、婆様の死後はますます慈悲深くなって、まわりの人みんなに、生き仏としてしたわれていたんだと。

ある日、山さ薪を取りに行った時、一匹の山犬が大きなベロだして「ゼーゼー」苦しんでいた。六兵衛さんは、

「何であの山犬、あんなに苦しんでんだべ」
と、おっかなびっくり近寄ってみっと、山犬の口から血がでて、ノドにでっけえトゲがささっていたんだと。六兵衛さん、おっかねんだけども、
「ほうら動くなよ。今トゲ取ってやっかんな。ほれ動くでねえ」
と山犬のトゲとってやったらば、山犬はたちまち元気になって、しっぽを、おっ振りおっ振り山のほうさ帰って行った。
それからというもの、村人が山犬に、おそわれることがなくなったんだと。その数年後、六兵衛さんは、村人に見守られて大往生を遂げた。村人は、墓の隣に地蔵様を建てて、六兵衛さんの冥福を祈ったんだとさ。

その地蔵様を「刺抜き地蔵」といって、刺が抜けないで困っている時は、このお地蔵様にお茶をあげて、お祈りするとたちまち抜けるといわれている。

おしまい

参考文献　旧南那須町「まちの民話」より